

## 道央におけるヒナチドリの栽培と人工繁殖方法

江別市 大沼弘樹

### はじめに

ヒナチドリは、フガクスズムシ、フジチドリ、ツリシュスランと共に、北海道まで分布を北上させた数少ない着生ランのひとつとして知られています。道内では、日高地方を中心とした太平洋側の山奥に点々と分布しているようですが(新田 2012)、樹上に希産することから、発見することもままならず、分布域の全容や、生態的な特性はあまりよくわかっていません。もともと希少なうえに、開発や災害、盗掘に伴う自生地喪失リスクもあり、将来的に何らかの保護増殖が必要になる可能性も予想されます。

ヒナチドリは一般に高温や蒸れに弱く、これまで栽培が非常に難しいと言われてきた(東京山草会ラン・ユリ部会 2001, 吉中 2014) 一方、近年は本州方面で比較的強健な系統が園芸植物として選抜、人工繁殖されているらしく、市販品として山野草愛好家に栽培されているという面もあります。筆者は、このような市販品を購入し、道央における栽培や人工繁殖の手法を模索した結果、ひとまず実用に耐えうる知見が得られたので、この場を借りてご紹介いたします。

### 栽培方法

本州方面では、近縁なウチョウランと同じ要領で、鹿沼土などでビニールポット植えているとの話も愛好家から耳にします

が、この方法では夏の蒸れによって株本が腐って倒れてしまうトラブルが多いとも聞きます。一方、道内におけるヒナチドリ栽培については、本会誌 31 号(2014)で吉中弘介氏が発表されており、軽石でできた鉢に水苔を詰め、その上に株を乗せることで良好に栽培できたとのこと。過湿にならないように、乾き気味に管理するのがポイントのようです。

恥ずかしながら、実験当時は吉中氏の報告を存じ上げておらず、2010 年頃からつい最近まで、あれこれ試行錯誤していました。筆者が試した中で好成绩が得られたのは、小さな素焼き鉢に水苔植えるか、平鉢の底に礫や砂利を入れ、その上に軽く押し 2-3cm の厚みになるよう水苔を敷き、上に球根を並べて、硬質鹿沼土でうっすら覆土する方法でした。吉中氏の報告と併せて考えますと、やはり用土を薄く敷いて、根が乾きやすい環境を保つことが必須ポイントのようです。ちなみに、着生ランやアツモリソウの栽培に、杉皮などを繊維状に破砕加工して作られた培養土「クリプトモス」が広く使われているので、これを水苔の代用としてヒナチドリに使ったこともありましたが、乾燥すると極度に水をはじき、水やりを増やせば過湿になるため、非常に扱いにくく断念しました。

毎年、融雪直後に植え替えるのが理想ですが、未開花苗のうち球根が小さく見つけにくいので、2 年くらい据え置きした方